哀れな老人を助けたみやげ

びっしょり水霜が降っていた。寒い晩秋の空気がS女の頬を冷たくなでた。S女は毎朝鎮守様へおまいりして、帰ってから朝の炊事をするのが日課のようになっていた。村はまだはっきり朝になりきっていなかった村でも金持だといわれているS女の家でも主人も雇人も、まだ起きていなかった。S女は数年前この家に嫁に来てから、一日も欠かしたことのない鎮守様への朝の日参は近所の人たちは勿論、自分の家の人たちにも知られていなかった。さすがに夫にだけは話しておいたので、うすうす知っていただけで、別にとがめ立てをするようなことは全くなかった。S女は安心して急ぎ足で鎮守様の方へ向かっていた。上戸の坂を上りつめると、見知らぬ老人が道ばたにうずくまっていた。S女は急に足をとめた。そして、じーっとその老人を見つめた。老人は八十才を少し越したであろうか。見すぼらしい姿だが眼光鋭く、どことなく気品が感じられる人だった。

『ご新造さん、お早いのう。』

『おじいちゃん、どうなさいました?』

『わしはのう、相馬の方から来たんじゃが年をとると仲々歩くのが困難じゃ。福島まではまだ遠いし、この近くの観音様にも参詣したいが、どうも足が不自由で……』

『それは、大変おこまりでしょう。無理せずに、ゆっくり参詣なさいな。』

S女は時間を気にしながら立ち去ろうとした。